

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 10 日現在

機関番号：22604
 研究種目：基盤研究(C) (一般)
 研究期間：2013～2016
 課題番号：25370289
 研究課題名(和文) 身体・ことば・貨幣をめぐるトマス・ハーディ研究 経済と連動する文学テキスト

 研究課題名(英文) Human forms, words and money in Thomas Hardy's novels: a literary text in conjunction with economic systems

 研究代表者
 亀澤 美由紀 (Kamezawa, Miyuki)

 首都大学東京・人文科学研究科・教授

 研究者番号：60279635
 交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：トマス・ハーディのテキストを身体・ことば・貨幣の象徴交換としてとらえ、近代から現代を通じて社会が経験してきたシステム変動 性の揺らぎ・文学ジャンルの動揺・経済システムの変化が個々バラバラではなく、密接に関連した事象として立ちあらわれる様子を析出した。身体が近代の刻印を受ける様子や、「テキスト化された身体」やことばが主体転覆をはかる様子、それに対応してリアリズムに亀裂が入る様子などを、『日陰者ジュード』『ダーバヴィル家のテス』を中心に分析した。またそれに先んずるかたちで、主体転覆のプロセスが、19世紀における経済システムの変動と軌を一にするものであったとの主張を、文学批評に辿った。

研究成果の概要(英文)：The focus of this study was on externalizing the process in which sexuality, the issues of literary genres and the economic systems are observed to be interrelated in Thomas Hardy's novels. For this purpose, I treated his literary texts as a symbolic economy in which human forms, words and money are circulated. I read *Jude the Obscure* and *Tess of the d'Urbervilles* as the main texts to show human forms are inscribed with the modern ideologies. The results were the "textualized body," subverted subjectivities and the incipient fissure in the realism style.

研究分野：英文学

キーワード：トマス・ハーディ ジェンダー論

1. 研究開始当初の背景

ハーディ文学に関しては、ジェンダー研究(特に女性をめぐる問題)、ジャンル分析(モダニズム文学としてのハーディ文学)、歴史社会的研究(階級や宗教をめぐる問題)などさまざまな視点から数多くの研究がなされてきた。しかしながら、それらの多くが一つの領域に視座を限定しているため、異なる制度 ジェンダー制度・文学という制度・経済システム を同時に貫くような視点をとれずにいた。また、現代社会をも視座にとらえるような視点がないことも問題であった。

たとえば、ジェンダー研究は性の問題を空間的に捉えがちなため、特に一作家に限定した研究の場合、歴史的視点が欠如しやすい。特にハーディ研究の場合、女性をめぐる問題があまりにも重視されすぎて、結果としてヴィクトリア朝における周縁化された女性といった結論に終始することが多かった。ハーディの文学を今あるようなものとして読む現代社会のセクシュアリティを分析対象に含めようという態度はなかなかあらわれなかった。

ジャンル研究、歴史社会的研究も、それぞれの欠点を抱えていた。文学ジャンルを論じた研究は往々にしてモダニズム偏重であり、ハーディ文学をモダニズム文学の先駆けとして称揚し、ためらいもなくリアリズムを断罪することに終始する傾向があった。ハーディの小説にある、まぎれもなくリアリズム的な手法は分析の日の目を見ずに打ち捨てられた感があった。ところがその一方で、歴史社会的研究は 19 世紀の社会状況をハーディ文学読解のためのデータとして用いることによって、いかにハーディが適格に現実をとらえたかを主張する。その前提にあるのはリアリズム的な読みをよしとする態度であり、同時にハーディはリアリズム的な視線で小説を書いたすぐれた作家であるという見方である。歴史社会的なデータを文学研究に用いようとする際の難しさがここにある。

このような問題のひとつひとつを意識にのぼらせながら、ハーディの文学を研究するためには、ハーディの小説世界を超領域的に

見る視点が必要と思われた。本研究はこの研究が開始される前から、すでに独自の視点で、ハーディ文学を社会と連動して動くテキストとしてとらえようとしてきていた。この研究は、以前の科研費研究「男性ホモソーシャルリティとジェンダー支配を近代から現代に辿るトマス・ハーディ研究」(平成 22-24 年度)「現代社会における性的マイノリティの捏造と解放にかかわるトマス・ハーディ研究」(平成 18-20 年度)の研究成果をもとにしており、それらの分析結果を大いに利用するかたちで開始された。ジェンダーを中心とした以前の二つの研究に対して、本研究は、文学様式と経済システムという二つのあらたな文化・社会制度を視座に加えた。その理由は、まさに上述のとおり、ハーディ文学を複合的にみるためには、異なる制度 ジェンダー・文学・経済 -を同時に貫くような視点が必要であると考えたからである。

2. 研究の目的

ハーディのテキストを身体・ことば・貨幣の象徴交換としてとらえることによって、近代から現代を通じて社会が経験してきたシステム変動が、密接に関連した事象であることを明らかにすることを主な研究の目的とした。そうすることによって、ジェンダー研究・ジャンル分析・歴史社会的研究のそれぞれの短所を補うことも可能だろうと考えた。

目的としては以下の3つをおいた。

(1) 性と文学様式のテーマを貨幣で結びつけることによって、異なるこれら二つの制度を、共通の物差しで論ずることを目指す。以前の科研費研究で行った『森林地の人々』の分析結果 当時一般化しつつあった信託紙幣に対して人々が抱いていた不安は、結婚制度やリアリズム的言語に対する不安と通底していたということ を踏まえて、ハーディのほかの小説を分析し、それぞれの異同を明らかにすることを目的とした。

(2) 「テキスト化された身体」(フランシス・バーカー)という視点を加えることによって、性や身体を再度、歴史的視座において分析する。参考: Francis Barker, *The Tremulous Private Body*(1984) [『振動する

身体 私的ブルジョア主体の誕生』末廣幹
訳 1997]。テキスト化された身体（生身の肉
体を不可視にされた身体）は、演劇（または
小説）の表象性を隠蔽するブルジョワ・リア
リズムにつながるのだというパーカーの主
張は、本研究が柱とする〈身体とことば〉の
問題につながる。ハーディの小説において身
体性とことばの問題がどのように絡み合っ
て描かれているかを分析することを目的と
した。

（3）ハーディの映画作品を、身体論を用い
て分析する。ハーディの小説はその多くが映
画化されているにも関わらず、文学研究とフ
ィルム・スタディーズの間に横たわる垣根に
妨げられて、それら映画作品は、今なお十分
に精査されたとは言いがたい。身体論は、パー
カーが行って見せたように、視覚的イメージ
を分析するのに有用性が高い。ハーディ文学
の視覚的テキストを、身体論を用いて分析す
ることにより、文学研究を表象研究というよ
り大きな枠組みのなかにおくことを目指し
た。

（4）上記4つを統合することで、ハーディ
文学をジェンダー制度・文学制度・経済シス
テムという複数の領域にまたがってみるこ
とを目指した。

3. 研究の方法

（1）研究のもっとも重要な理論的柱として、
セジウィックのホモソーシャル連続体理論
をおいた。近代の男性性は、ホモソーシャル
な欲望にホモフォビアとミソジニーが刻印
された社会的構築物であるという定義のも
とに、ハーディの描く男性登場人物の男性性
を考察することとした。

（2）研究の理論的柱のもうひとつとして、
身体論を据えた。フランシス・パーカーはサ
ミュエル・ピープスの身体を「私的空間のな
かに、脱政治化された私的領域へと封じ込め
られた近代的主体の身体」と称した。ハー
ディが描いたジュードやヘンチャードとい
った男性登場人物たちは、まさにこの17世
紀のピープスの後継者ではないかとの予測の
もとに、ハーディ文学の身体性を探ること
とした。

（3）貨幣論の流れをたどり、象徴交換とし
てハーディの世界を見る際の柱の一つとす
ることとした。

（4）現代社会の性に関するイデオロギーを
析出するために、映画作品を研究対象とし
て掲げた。

4. 研究成果

（1）『日陰者ジュード』分析。『ジュード』
は、それまでの伝統的で確固とした男性主
体をもはや前提とすることのできなくなっ
た世界を、我々に提示しているとの結論を導
き出した。ジュードのリアリズム的な手法に
注目し、それがジュードの男性性確立を阻
む動きをしていることを指摘した。20世紀
以降の批評は、『ジュード』をモダニズム
文学として論じてきており、ジュードの男
性性確立が阻まれているという指摘とモ
ダニズム文学との結びつきはさほど意外
ではないだろう。しかし、本研究の新しさ
は、ジュードの阻まれた男性性を、リア
リズム的手法と結びつけた点にある。も
っと正確に言うならば、『ジュード』は
リアリズム/モダニズムの二項対立その
ものを崩壊させているのであり、その
あおりでジュードの男性性も瓦解して
いくのだ、というのが本研究で得られた
分析結果である。具体的には、ジュー
ドの身体がテキスト化されている事実を
明らかにし、その身体が近代のパラ
ダイムを内側から破壊していくのでは
ないかとの仮説のもと、分析を行った。
そのうえに経済システムの変動という
視点を加えた。『ジュード』の場合、
貨幣交換そのものに注目するより、
価値の基準点（原器、真実性を保証す
るもの、ゴールドに相当するもの）の
消失という観点で分析を行う方が有
効であることが判明した。

（2）『ダーバヴィル家のテス』分析。セ
ジウィックによるセクシュアリティ研
究のほか、近年における masculinity
 studies を参考に、男性登場人物の
男性性を考察した。Herbert Sussman
の言う「雑多な社会的構築物」
multifarious social constructions
(Victorian Masculinities, 1995, p.13)
としてのヴィクトリア朝男性性をハー
ディの

テキストに見出した。男性性獲得のテーマに特権化してこの小説を読み、そこに描かれる男性性が明らかに社会的構築物であることを提示することによって、ジェンダーと貨幣（経済）との絡みを解きほぐすことができた。いまなお少ないハーディの男性性研究に、先鞭をつけたかたちである。

また、映画「テス」のテキスト分析のほか、『カスターブリッジの町長』に関しても身体論・貨幣論の観点から、ヘンチャードの男性性に関する分析を行った。

(3) 上記の研究分析が依拠している理論

ジェンダー論・ジャンル論・身体論 を概観し、まとめた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計5件)

Miyuki Kamezawa “*Jude the Obscure*, An Object Lesson: ‘Bad Marriage Drives out Good’” 『人文学報(表象文化論)』513-10号、首都大学東京、2016年。査読無。

Miyuki Kamezawa “Symbolic Economy of Words, Money and Bodies: E.K.Sedgwick and Beyond” 『人文学報(表象文化論)』512-10号、首都大学東京、2015年、pp.73-94。査読無。

亀澤美由紀「アリスが地下に落ちる、金本位制が崩れる 1973年のふたつの出来事」『ユリイカ 150年目の「不思議の国のアリス」』青土社、2015年、pp.305-313。依頼原稿。

亀澤美由紀 「Jane Thomas, *Thomas Hardy and Desire: Conceptions of the Self*」『ハーディ研究』40号、日本ハーディ協会編、2014年、pp.85-90。(書評) 依頼原稿。

亀澤美由紀「ロマン・ポランスキー『テス』」『PHASES』4号、首都大学東京 人文科学研究科表象文化論分野、2013年、

pp.36-47。査読無。

[学会発表](計1件)

Miyuki Kamezawa, “*Jude the Obscure*: Dismantling the Fiction of a Secure Subject” Seminar presentation at School of English at the University of Leicester, UK.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

亀澤 美由紀 (KAMEZAWA MIYUKI)

首都大学東京・人文科学研究科・教授

研究者番号：60279635